

怒りを表現してもいいのか、どのように表現したらいいのかというのは難しい問題です。個としての自尊心を立て直すことになる場合もあれば、収まりがつかずに破壊的な結果になっていく場合もあります。その分水嶺がどこにあるのか、一筋縄ではいかない問題ですが、今回は、怒りの動機と所在という二つの要因に注目してみたいと思います。

正当な怒りか、自己欺瞞の怒りか

まず怒りの動機に注目してみましょう。自分が被った理不尽に対して正当なる怒りを表明するというのが、合理的でストレートな動機でしょう。これは、侵害された権利の回復につながったり、自分は間違っていないという自尊心の立て直しにつながったりします。そして、表明すべきことを表明したら、しかるべきところに収まっていくものです。

一方、本当はどこか自分に後ろめたいところがあるのだけど、それを認めたくないの、悪いのは向こうだと言いたくて怒りを表明する場合を考えてみましょう。これは怒りの正当な根拠がありませんし、感情のごまかしなどストレートとは言えないところもあります。また、このような怒りを表明しても、元々の後ろめたさは処理されないままなので、どれだけ怒っても収まりがつかず、さらに、相手からすると理不尽に怒りを向けられていることになるので、相手にとっての正当なる怒りを返されることもあるでしょう。



個としての怒りか、集団の怒りか

上記の怒りは動機の違いはあっても、いずれも個人の心の中の怒りです。それとは別に派閥争いや国家間の紛争・戦争に代表される集団の怒りがあります。集団の怒りはしばしば扇動的で、個としての思考機能を停止させる力を持っています。したがって、互いに内省することのないまま怒りの応酬がエスカレートします。心身ともに死傷者が出る破壊的な結果になりやすいでしょう。

所属する組織や国家など、集団的な要素にアイデンティティの基礎を置く人は、この集団の怒りを自分の怒りと混同して、扇動されやすいかもしれません。それは破壊的結果への加担と言って過言ではないでしょう。この集団主導の扇動的な怒りを、団結権をはじめとした、個としての怒りが主導する戦略的連帯と峻別することが怒りを破壊的な結果に終わらせないために重要でしょう。

